

い。寝冷え／＼なんて考へつゞけてゐたら熟睡することも出来やしない。之れなんかお母さんに寝ずの番を頼むか、蒲團をはいでもいゝ豫防注意をよくして貰ふか、きつちにせよ、幼児に言つたつて仕方がない。こんな風のこゝしは、他事もいくらもあるこゝしである。『お休み中も歌をうたひ、遊戯をし、繪を描き、製作をし、自己保育を怠るべからざるこゝし。』そんなこゝしをいふ先生もあるまいが、又あるやうの氣もする。先生も何んの氣もなくおつしやるに過ぎなからうが。

それならば、かういふこゝしを注意すべきかといふは、私なら、夜早く寝るこゝしを何よりも強く約束して置きたい。それも、親の方で注意しなければ、實行出来ないこゝしであ

誘導保育

第十三週

七夕まつり

この祭りは、陰曆の七月七日に行はれるもので、本來は

るが、親が言つても、なか／＼實行され難いこゝしである。それを幼稚園でよく言ひ聞かせて置くは案外——ではない。それが當然かも知れないが、なか／＼きゝめのあるものである。そして、子ぎものよき生活の一切の元締めになるものは、此の早寝の一事に有すといつていゝ位大切なこゝしである。

それから、之れは生活訓練といつていゝかさうが分らないが、朝顔の鉢を持たせて歸すこゝか、何か一つの繼續製作を課するこゝか。それを夏休み中の仕事にさせるのである。これは相當面白いこゝしであらうし、生活訓練ともなるものである。

その他いろいろ。

初秋の行事であるが、現今は殆んゞ陰曆云ふものを採つてゐないし、又一ト月おくれの八月七日にする所もあるが、その頃は幼稚園がお休みである云ふ様な關係で、新

曆の七月七日にしてしまつたのである。私共もずつと土用前の七月七日にして貰つて來たので、今更いぶかりもしなくなつてしまつたが、或書には、「初秋の夜空の渺茫たるに銀河を仰ぎてこそ七夕祭の感はあれ、土用前なる眞夏の夜にてはふさはしからず」とあり。

七夕まつりは、盛大にするところ、ほんの形ばかり位に簡単に済ます所等、地方によつて様式が異なる様である。年々入學して來る實習科の生徒等について聞いて見ても、そんな事をするのか知らない人もある程である。併し年中行事として五月の菖蒲の節句ミ、九月の重陽の節句ミの間の一節句ミして昔から行はれてゐるものであるから、幼稚園としては年毎に催して、子供等の記憶の泉の一つとしてやり度いものである。私共も幼時の記憶を辿つて見るミ懐しい思出がある。いろ／＼な綺麗な彩紙を、この日だけは思ふ存分に買つて貰つて、何でも自分の好きなものを、作り度いものを作つて、竹の笹に吊したものだつた。短冊や、吹流し、又はお人形の着物だの、あみだのを思ひ／＼に切り、之を下げるのがまた樂しみだつた。この頃は幼稚園の特技として、可愛いらしい提燈だの、あみだの、ふら／＼人形

だの、それからお舟にひょうたんの下つてゐるのだの、お船から下した網にお魚の下つてゐるのだのミ、いろ／＼繊細な美術品ミも云ひ度い様な複雑なものも先生方は知つて居られる方が多いであらうから、こゝいふものを、いろ／＼拵へて、この七夕祭りの飾りを賑はして上げたら子供達も囁喜ぶ事であらう。

それからこんな思出もある。この七夕飾りの短冊には、芋の葉の露で墨をすり、それを筆につけて天の川、ミか七夕様ミか織姫さまミか、この節句にふさはしい文字を書いて上げるミ、手蹟が良くなる、ミ云ふ様な傳説も聞かされて居るので、幼いながらも上手になり度いミ思つて、一生懸命に筆で書きつゞけた記憶もある。それから七夕様の日に、川で髪を洗ふミ、毛筋のいゝ、いゝ髪になれるミ聞かされて、幼な心にも、いゝ髪 of 所有者になり度いミ思つたのか、來る年も來る年も缺かきず、奥山から流れて來る里川の流れに頭を浸して洗つたものだつた。又こんな事もあつた。七夕の日に雨が降るミ、その年は栗に蟲がつく、ミ私の村では語り傳へられてゐるので、秋の樂しみの栗が蟲栗

になつてはつまらないと、幾日か前からその日はさうぞ雨の降らない様に祈りつけてゐたものだつた。それが、折角の祈も空しく雨が降つてしまつたので、裏山の木苺等を取りながら、来る秋の栗の事等を考へて、がっかりした思出等も、今かすかに浮んで来る。私はこんな幼時の記憶等を思ひ出して毎年七夕に向かふ。

保姆しては前日にいろ／＼の色の紙の用意をして置く。色紙や短冊は、大きな裁斷機(或は鋏等にて)で切つておく。あみ、きもの、提燈、お舟等は、子供等が自分を取り巻いてる中で、拵へ様と思ふ。子供達は、自分達が作らなくても(複雑なものは子供には作れぬ)先生の作るのを見て居るだけでも、充分に楽しそうである。若し、着物の型等は、女兒等作り度からうから、出来榮えはさうでもよろしいから作らせるまい。

それから自分の聞きおぼえの、「短冊に何か書いて七夕様に上げる」と、字や繪が大變お上手になれるのよ等云つて聞かせて、用意して置いた硯と筆を出して来る。そして一人残らず短冊に何か書かせる。その前に、七夕様に上げ

る言葉をして、天の川、さか星まつりさか、七夕様さか言つた様の言葉を、片假名で黒板に板書して置いて、これを書いてよし、ご自分の名まへでもよいし、繪でもよいし、云つた工合にして銘々に選擇させる。そしたらこんな事があつた。少しも字の書けなかつた人が、子供心にも、ちつとも字の書けなかつたのは自分ばかりだつた云ふ事に心付いて、家へ歸つてからお母様に話して、それから僕も字をおぼえるよ云つて、ポツ／＼自分の名等から興味を持つて、覺え様さし出したこの事であつた。思ひ設けぬ刺戟を與へた事であつた。

短冊等の色は、昔から五色の彩紙を……云ひ傳へられてゐるが色模造紙の中でも強烈な原色の様なのがはつきりして、ひき立つ。その他のものもそれ／＼色合を考へて、きれいな七夕まつりに出来上らせる様にしたい。

これの期待効果は、年中行事に對する興味、美感の涵養、手技、こゝ言つた様のもの、

繼續時間は、その日一日、午前中この仕事にかゝり切るさか、もつ／＼つゝいて、子供のお歸り間際に出来上つて庭

に立てられるか言ふ位のものであらう。

第十四週

お話と唱歌の會

もう二三日限りで、あきは暫くの間離ればなれに居るのだと思ふに、何もなく名残を惜しみ度い氣持になるものだ。子供達には、それ程先き先きの事を思つて見る等の様子は見受けられないが、こんな氣持で、終業式の前日あたりをお話と唱歌の會の日に當てる。その會の前日位に子供達に相談を持ちかける。

「もうあしたは、あさつて二日きりであきは長いお休みになりますから、あしたは皆さんで、お話だのお唱歌だのお遊戯だのを交る々々して面白く遊びませうね、先生もお話をして上げますし、人形芝居も見せて上げますよ」

ミ語り出して、吟誦、唱歌、遊戯等は、この一學期の總ざらひの様なつもりで、それ／＼に人を割り當てる。その合間に先生のお話とか、人形芝居とか云つた様な子供等に享け身のものも加へてプログラムを作り、黒板に書いて置く。前日の相談の時は割合に屈託なく、一人でするお話を

様なものでも、さん／＼引き受けてプログラムだけは見事に出来るものだ。併し愈々當日になるに、席等も日頃と違つたものが作られ、まん中にお花でも飾られたりするに、子供等の氣持も改まるのか、今から云ふ時になつて昨日の約束は水に流した様に忘れられて、折角のプログラムが亂れ勝ちになるものである。だから保母はその場になつても周章せずに、みんなの子供をそれ／＼に組み合せて、兎に角一人残らず、何等かを發表させるに云ふ手際が大切である。何れにしても五ツ六ツの子供であるから、始めるに間もなくみんなの緊張が緩み、そろ／＼立ち歩かなくなつて、話し合ひが始まるが、これをうまく統制して兎に角、みんなが一通りし終へるまでは、共に聞き云ふ態度を持ち続け度いものだ。

この會の期待効果は、發表の練習、人の發表に對する態度、共に楽しむ心、ミ言つた様なのがそれだ。

繼續時間は、經驗ある方はあなたも御承知の事で、そう長続きするものではない。小一時間もつゞくだらうか、かくして第一學期も明日一日でおしまひになる。この頃

になるに附添を離さない人も無くなり、先生の袖にばかり
縋つてゐた人も二三人の人さからかひ遊ぶ様になり、その
他の人達は幼稚園をわがもの顔に楽しむ様になつて來た。
折角馴れた所で長のお休みになるのも惜しい氣持にもなる
けれど、このお休みを各自それ／＼の二ヶ月を過して又會

唱歌遊戯

第十三週

唱歌 一回

汽車ポッポ(新作唱歌遊戯)

この曲は「汽車ポッポ」の感じをよく表はしてゐる。前奏
を聞いてゐる間に、子供たちはすつかりリズムに乗つて
しまふ。何かじつこしてはゐられない氣持にかられて、
シユッ シユッ シユッ シユッ ミカシユッ シユッ
ポッポ……ミカくちずさんで汽車の氣分を出してゐ
る。すぐに覺えられる。輕快に歌ふこと。

遊戯 二回

ふ九月の日の、みんなの成育の多いのに腫をみはる日の樂
しみも思ひやられて又別の樂しみを持つて別れを惜しむ。
明日は、終業式のあきで、改めてまたお休み中の諸注意
等を親に代つてして諷別の言葉こする。

汽車ポッポ(記事参照)

あのポッポ／＼／＼ミ煙をはいて勇ましく馳けて行く
汽車ポッポの氣持を出して、愉快に元氣よくしたい。前
奏の時の動作は大きくする様に。トンネルをくゞつて行
く所がやはり一番うれしさうだ。慣れて來るミ、つい急
いでくゞりたくなつて、曲に合はさないで前の人を押し
てごちや／＼に馳け出す様な子供も出て來るから、注意
が必要である。

かたつむり(記事参照)

かたつむりミ云へば子供は何を先づ想像するか知ら？あ